

燧灘の孤島、伊吹島 ～瀬戸内海島嶼の中での特殊性と一般性～

稲田道彦（香川大学 経済学部 教授）

燧灘の孤島、伊吹島

～瀬戸内海島嶼の中での特殊性と一般性～

稲田道彦

香川大学瀬戸内圏研究センター
経済学部

「燧灘の孤島、伊吹島 ～瀬戸内海島嶼の中での特殊性と一般性～」という、ちょっと孤島という割には狭いのですが、一つだけポツンと観音寺の沖に島が浮かんでおります。その島の話をしていただきたいと思っております。

特殊性と一般性というのは、瀬戸内海のほとんどの島に共通して言える性質を一般性というように考えております。それから、その島の個性に根ざした性質のようなものを特殊性

というふうにして、この特殊性と一般性という二つの考えの中で、伊吹島を考えてみたいと思っております。

瀬戸内海島嶼の中で、今、どの島も人口減少が起こっております。本当に極端な島になると、数百人いた人が今 20 人というような状況にすらなっております。ですから、もう 20 人まで減ってしまうと子供が生まれません。このように子供がいなくて、平均年齢が 70 歳以上という島がいくつも出現しております。

「これはもう島としてはしょうがない現象なのか」と考えてみますと、私は沖縄の一番南に位置する島々を歩いているのですが、ああいっただ島々では子供さんが生まれています。だから、これは島だからそういう現象が起こっているというふうには言えないのかも分かりません。けれども、瀬戸内海の島々では、今、共通して人口が減っている。それから高齢化、高齢人口の増加が起こっております。

それから生産年齢人口の減少です。16 歳から 60 歳までの人がほとんど島に住まないというような状況が起こっております。これも瀬戸内海の島では一般的に起こっていく現象なのか、それとも個々の島々が持っている特性によって、その現象が起こってきたのか、というようなことを考えてみたいと思っております。

人口減少の理由としては進学だとか就職だとか子育てだとか、そういうことで減っていきます。社会現象、つまり仕事を求めて外に出て行くという現象がずっと起こってしまし

瀬戸内海島嶼の人口の減少は、 受容すべき現象なのか

- 少子化 出生率の低下 子供のいない島
- 高齢化 高齢人口の増加
- 生産年齢人口の減少、進学、就職、子育て
- 人口の社会減少
- 人口の自然減少
- 就業できる産業の減少

た。ですから働き盛りの人が島に住まないということがまず起こって、今は残された老人が死んでいっています。要するに、島の人口減少の段階としては、社会現象を過ぎて今は自然減少という段階に進むというのが瀬戸内海の島々の現状であります。これは本当にどの島でも一般的に進んでいく現象なのか、瀬戸内海地域に共通しているのか、その島独自の性質からくるのかというようなことが、今、我々の中では大きく問題となっていて、問題意識の根底にある現象です。どの島も産業がないので、仕事がない。仕事がないから人口が減るという論理で、我々は人の減少を、そういう理由で起こっているのだらうと考えております。

島の産業を考えてみると、農業、漁業という、多くの島では農業がずっと盛んで、しかも島の地理的特性を利用して、例えばジョチュウギクの栽培である工芸作物で非常にお金儲けをした時代もありますし、暖かい気候を利用して花を栽培したという時代もございます。漁業も一時期非常に良い時代もありましたけれども、今、資源が少なくなって、漁業も不振という状況になっております。鉱業では石材業というようなものが産業としてあり

ました。第三次産業として、運送業、建設業というような住民にサービスをするような産業も島では興っていました。しかし、今は本当に第一次産業が瀬戸内海の島々では不振になっております。他の島々でも、そういう第一次産業の不振という中で、どう考えていけば良いのかという問題があります。

今日とり上げる伊吹島は、実は漁業では非常に収入の多い島です。儲かっている島といえます。今日の一つの隠れたテーマとして、「産業を興せば島は繁栄するのか」、「産業が充実していけば島は発展していくのか」という問題意識が根底にあって、伊吹島の話をしたいと思っております。

もう少し一般性の話を続けます。島が置かれている地理的な特性として、周辺にある島は本土から離れている場所にある。ですから島で全部の物品を供給することは無理で、どこかに頼らなければいけない。基本的に他の場所に依存しなければ島の生活を持続できないという宿命がございます。それからもう一つは面積が小さい。面積が小さいと、例えば川がない。それから樹木が少ない。ですから今は外から運んでくるのが可能になりましたけれども、昔は飲み水がない。飲み水をどうするのかという問題。それから一度木を切ってしまうと、燃料が無くなってしまいます。次の木が生えるまで20年かかるというような状況で、水と燃料の問題は島に住む人々にとっては宿命的な条件でございました。

それから海に囲まれているということで、基本的に海上交通に頼らなければなりません。明治時代のことを調べた宮本常一という民俗学者がいるのですけれども、彼はこんなふう

島の産業

- 第1次産業 農業、漁業
- 第2次産業 鉱業、製造業
- 第3次産業 運送業、建設業、商業、観光業、サービス業、公務

に言っております。「島は船さえあれば全部が道路なので、だから日本において島は割と発展した場所で、逆に言うと日本の山間部は非常に遅れていた時代が長かった。ですから山間部の僻地に比べると、島というのは相対的に進んでいた場所である」。つまり島は船さえあればどこにでも行くことができるという点で進んでいた場所だったのですけれども、山間部には道路が今はどこにでもつながってしまって、結局のところ、島が遅れていくという状況になっている。ですから日本の本土側の交通路網の整備によって島が相対的に遅れていく。島では運賃が障害となります。ですから、いろんなものにお金が加算されなければいけない。

それから災害という面でも非常に弱いです。つまり人も少ないし、海の災害というのは、いろんな場面で起こりうるので、災害という面でも島が直面する問題は数多くあります。

それから、住む人が少ない、面積が小さいということに連動しているのですけれども、住む人が少ないために、共同しなければ問題が解決できないということがあります。つまり事が起こると、バラバラで対処していたのでは、島では解決がつかない。ですから共同体のシステムというのが非常に緊密に作られています。共同体のあり方も、例えば金銭で縛る上下関係のようなものもありますし、宗教で連帯感をはかる横の関係もあります。縦横いろいろな形での社会的な緊密というか、社会的なルールが作られている。ですから島はそこで暮らすために、我々が思っている以上のいろいろなルールができています。それが結局、島を運営するために、必要なルールとして機能しています。

それから、人が少ないということで社会の変化に対して、非常に鋭敏に反応してしまいます。島は独立してというか、世の中の動きと関係なく動いているというふうにお思いになられるのかも分かりませんが、逆に言うと、島はちょっとした経済変化の影響を最も鋭敏に受ける場所です。島では日本国の社会現象の変動に対しても、本土ではあまり問題にならないようなことが非常に早い時期に鋭敏に出てしまいます。その時期に対処を誤ってしまうと、取り返しのつかないような状況にすらなりえます。だから、島でどんな判断がされたのかということが、その後の状況に関係してきます。ある意味で言うと、このようにいろいろな事の条件が鋭敏に現れるために、島の人には非常に失礼なのですけれども、

島という場所の地理的特性①

- 位置として周辺にある。中心地(本土)から離れている。必需品を他に頼らねばならない。他の土地と繋がらなければならない。
- 面積が小さい。住み続ける環境が脆弱、水資源、燃料、災害時の食料等、人が常に共同して事件に対処しなければならない。
- 海に囲まれている。海上交通にたよる。船さえあればどこも道路という状況。運賃が障害となる。災害。

島という場所の地理的特性②

- 住む人の数が少ない。共同しなければ問題の解決ができない。
- 人が少ないので、社会の変化に対して鋭敏に反応する。
- 多人数の需要があって成立する公共のサービスが得にくい。高等学校、病院、医院、商店、飲食店

我々は社会現象の実験場にするような事例が多いです。例えば人口の減少なんていうのは早い時期に出ていますし、高齢化というの、本当に本土で問題になるずっと以前から問題になっているので、我々が思った以上に小さな島というのは、社会現象と連動していて、その影響は非常に早い時期に出てきます。

それから、「多人数の需要があって成立する公共のサービスが得難い」と言うような、要するに大勢の人がいるからこそ成り立っているようなサービスが得難いという状況があります。これには高等学校、病院、医院、商店、飲食店、いろんなものがあげられますが、そういうものが島では得られないという状況の中で、人々が生活を作っていかなければいけない。まあ作ってきたわけです。そういう条件の中で個々の島々のいろいろな事を考えながら今まで私は研究してきました。

島の状況をバックアップする意味で離島振興法という、法律を国が制定して、住み難い島を、住み易くしましょうということで、いろいろな形の援助をしてくれています。これ理念の一部ですが、下から三行目に「これに基づく事業を迅速かつ強力に実施する等、離島振興のための特別の措置を講ずる」と書いてあります。離島振興法で具体的にはいくつも施行策があがっているのですけれども、二番目の所では、「交通通信を確保するための航路、航空路、港湾、空港、道路等」という公共施設の充実のために、大きなお金をつぎ込んできました。

それから三番目のところでは、農林水産業などを含む産業があがっております。それから六番目に医療です。十番目に観光というような形で、かなり項目がたくさんあがっていますが、離島振興法は、いくつもの項目によって、離島での生活を充実させる方向で、島々にとっては大きな恩恵をいただける法律になっております。

離島振興法によって島の環境は格段に改善しました。特に港湾であるとか、交通路網、それから近代的な生活が実現できるようになって、人間が生きていくために毎日必要な水の問題は、海底送水により、水が得られない島が無くなるというような状況になりました。それから交通の面でも、船便の充実のために、いくつもの援助がなされて、島々はこういった面では生活の向上が図られております。

離島振興法

産業基盤及び生活環境等に関する地域格差の是正を図り、並びにその地理的及び自然的特性を生かした振興を図るため、離島の振興に関し、基本理念を定め、及び国の責務を明らかにし、地域における創意工夫を生かしつつ、その基礎条件の改善及び産業振興等に関する対策を樹立し、これに基づく事業を迅速かつ強力に実施する等離島の振興のための特別の措置を講ずる(一部 理念)

離島振興施策

- 二 本土と離島及び離島と離島並びに離島内の交通通信を確保するための航路、航空路、港湾、空港、道路等の交通施設及び通信施設の整備、人の往来及び物資の流通に要する費用の低廉化その他の必要な措置に関する事項
- 三 農林水産業、商工業等の産業の振興及び資源開発を促進するための漁港、林道、農地、電力施設等の整備その他の必要な措置 離島の振興の基本的方針に関する事項
- 六 医療の確保等に関する事項
- 十 観光の開発に関する事項

当初、離島振興法ができる時に外洋離島と内海離島という 2 つのエリアに分けました。実は外洋離島は放っておくと本当に人が住まなくなってしまうので、内海離島に比べて少し手厚い保護というようなポリシーがありました。内海離島の方は本土に近いので、それなりにうまくいくだろうという考え方がこの法律の根底にありました。これは割と早い時期に解消されて、外洋離島と内海離島の差は考えられなくなってしまうのですが、私が島を歩いて現実を見てみますと、内海離島の疲弊の方が、非常に大きな問題であると感じております。つまり沖縄県の島々はそれなりに産業も人々の生活も充実しているように思います。

これはどこから生じるのか。私自身の仮説としては「内海離島では本土が見えている」。つまり、ちょっと先に行けば格段に便利な生活が待っている。外洋離島の場合は「もうそこで暮らさざるを得ない」という諦めがいろいろな政策、いろいろな社会のルールを作ってきている。内海離島は少し行けば格段に便利な生活ができるという状況が、特に内海離島からどんどん人をはき出してしまったのではないかと。私のこの仮説が、本当かどうか分かりませんが、これから先、さらに考えてみたいと思っていることのひとつです。

では、伊吹島をご紹介します。場所ですけれども、他の島々は皆ある意味群れをなしているのに、伊吹島だけは燧灘の間にポツンと一つだけの島です。伊吹島が他の島と変わっているのは、88m という標高であるということもありますけれども、上は平坦で、周囲が 70 メートルぐらいの崖に囲まれている島です。

もう一つ伊吹島が他の島と非常に変わっているのは、島が岩盤でできているということです。ですから 1m も土壌が積もってはいません。1m 掘ると岩盤に行き当たります。他の島は割と土壌があって、そこで農業をすることが可能なのですけれども、農業がほとんど難しい状況の中で、最も人口が多い時で 4 千人の人口が住んでいました。戦争が終わって。実は伊吹島は生活の面で非常に住み難い島なので移住が行われました。戦前には植民地であった朝鮮半島の東海岸に出村を作ってそこに大勢移住しました。そして、朝鮮半島の東海岸で非常に漁獲をあげました。実はその朝鮮半島の東側に新しい漁業のやり方を伝えたのは、日本人のこういう出村を作っていった人々であります。

離島振興法は島の生活環境を改善した

- 離島振興法によって公共投資が行われ、港湾、船舶、道路、発着場等の整備が行われた。
- 島に近代的な生活が実現できることになった。(水、燃料、交通ができない島嶼はなくなった)
- 人口減少に関する限り、外洋離島と内海離島、当初の予想が逆になった。(内海離島の人口減少が大きい)

伊吹島



話を聞いていると、例えばダイナマイトをポンと投げて、爆発させて、そして浮き上がった魚を拾うような乱暴な漁業を行ったようです。ですから、ある意味、朝鮮半島の人々にとっては非常に迷惑な話で、地形も変わってしまうし、そういう略奪的な漁業をやったという話も聞いております。そういう人が島から多く出て行かざるを得ない。それは居住条件が非常に悪いからです。水がない。水がないということは島の生活を制限する致命的な要因なのですが、では「なんでこんな所に4千人も住んだの」という逆の疑問をもたれると思います。これはさっきお見せした「真ん中にポツンとある孤島だ」と言いましたけれども、漁場が広いからです。つまり周りに広い漁場を持つことができる。つまり漁業が非常に産業としては成り立ち得た島であったからであろうと思われま



少し見難いですがけれども、これは1カ月前に沖縄から帰ってくる途中で、飛行機の中から見た伊吹島です。伊吹島がどんな島だったのかということ「離れ島漁村の学習の記録」という観音寺の教育委員会が1958年に出した子供の作文が載っておりますので、それを読みます。「島の生活がいかに困難であったか」ということを。



落ちぶれた漁師

6年生の女子生徒です。私の家は漁師です。毎日、朝早く浜へ下がり行って、船に乗り込む前によその人と一緒に浜まで歩いて行くときには、こう言います。「もうこの頃、漁も少なくなったね」と言い。また横の人は「サノの船では毎日毎日大漁だ。もううららもサノへ行かなかったな」と笑いながら浜へ下がります。船に乗り込んで行って、出て帰ってくるまでは、私にとっては何よりの楽しみです。それはどういう訳かと言ったら、今日も魚が多く獲れているかと思って楽しみです。そんなことを楽しみに浜へ魚を取に行きます。自分の家の船が帰るまで、待っている間によその人との話では「さっぱり魚がおらへな。もうどこどこへ働きに行かなあかな」と言って、ザルを持って船へ乗ります。

自分の家の船が帰ってくると、すぐ魚かごをお兄さんに渡します。私はお兄さんに「今日、貝なんぼじゃ」と言ったら、兄は辛そうな顔をして「3個」と言って、私に貝の伝票をくれます。イセゲタを積んだ一番始めの日、貝や魚はいつもたくさんでした。ロウガンは

260 くらいで、3杯で大漁でしたが、いまでは半杯です。

お父さんは家へ帰ってきて、手を洗ってすんで、中へ上がってきて話をします。父は「漕ぎ行ってるのもあほらしのに」と辛そうな顔つきで言います。お兄さんは「どこそこへ働きに行く」と言っています。お父さんは「行かす」と言っているが、お兄さんと一緒に行く人は「仕事を抜けてすぐ帰ってくるんだから」と言ってお兄さんを行かしません。年がら年中、漁師ばかりあきがくるけど、漁師の他行くところがありません。

魚が獲れる頃、むちゃくちゃ獲って、無くなったところに漁師がとてもあずっています。今頃はイセゲタ、ドロゲタの2つに分かれています。ドロゲタのないところはイセゲタでします。ドロゲタも始めの頃、とても大漁でしたが、「ドロゲタよりイセゲタの方が良い」と言って、またかえします。

4月になったら船が休みですから、船を持っている人は働き口を探して働きに行きます。また船を出す時期が来たら、またゆきに帰ってきます。もうその頃の魚はとても大きくなっています。

原文のままというふうに書いてあります。それからもう一つ。

伊吹と水

5年生の女子生徒です。伊吹は地下水から水が出ないので、穴を掘って雨の水を溜めなければなりません。それに雨の水は、放射能があるかもしれません。うかつに生水は飲めません。その上、洗濯や顔を洗ったり、いろいろなものを洗います。そうすると、溜めていた水はずんずん減って行って、その上雨も降らなければ、溜めていた水はもう底の方になってしまいます。そうするとどんなに困るかも分かりません。

だから梅雨時になると、たくさんの水を溜めておかなければなりません。毎年夏になると水が無くなり、役場の水を買って足しにしなくてははいけません。米でも満身に洗えない時もあります。去年の夏、学校の水が無くなって、床や机を、水を使わないで、がらがら雑巾で拭いたこともありました。あの時は、お母さん達の洗濯した後のゆすぎ水をとっておいて、油のついたものや特に汚れたものをその水で洗いました。

私達は、水を無駄に使わないように言われました。今年もこのように水に困る時が来ると思います。今でもお母さんは私達に「水を無駄に使うな」、「使うな」と口癖のように言います。

という子供の作文なのですけれども、昭和30年代ですけれども、非常に伊吹の人々の生活は厳しい状況がずっと続いていました。

これが今も残っているイズミなのですけれども、こういう形で岩盤に水を溜めて、雨水が全部溜まるような形で7つくらいありました。現在は大きいのが2つ残っています。これが人々の水です。今は水道が来たので使われなくなって、このまま残されております。

それから伊吹の民俗資料館の写真で、こういう形で毎日毎日生活用水を汲みに。飲み水はこういう形で井戸と称して、岩盤を1メートルくらい掘って、そこに屋根からの雨水を溜める施設があります。これが飲み水の起こりで、今も家のそばにこういう雨樋で集めている水場が残っています。

島ではこのように非常に厳しい使い方をしながら、雨水だけで生活をしていました。今は海底送水が来て、水が充分使えるようになって、こういうものがほとんど使われなくなってしまいました。

先ほど伊吹の漁場の話をしましたけれども、愛媛県と共同の入漁漁場があります。これは私が1989年に聞き取りした時の漁場の範囲で、今もこれが守られているかどうかは分かりませんが、愛媛県から香川へ入漁漁場というのが②番になっていますから、このあたりまで愛媛県との共同漁場になっています。①番が慣行専用で、④番は香川から愛媛への入漁漁場。このあたりまで伊吹の人は行けるといような形になります。これが県境ですけれども、こういう形で、お互いに魚を獲り合っている。主に「かたくちいわし」で、イリコを作るという形になっています。イリコを作る漁業そのものは、昭和3年ぐらいに始めて産額が非常に多くなっていきます。

イズミ



伊吹島民俗資料館歴史写真
水汲みの様子

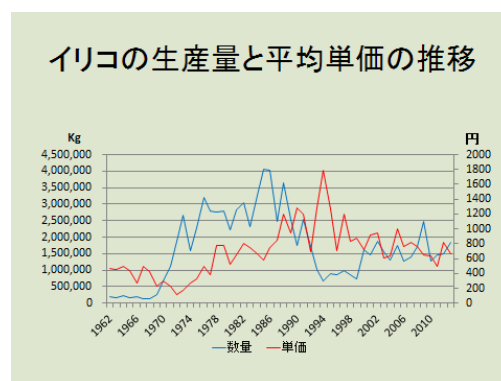
井戸



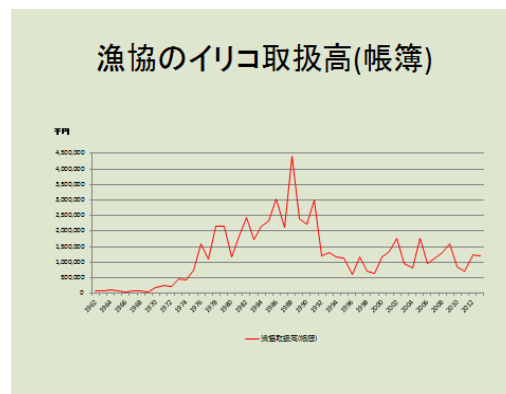
伊吹島の漁場 1989年の調査による



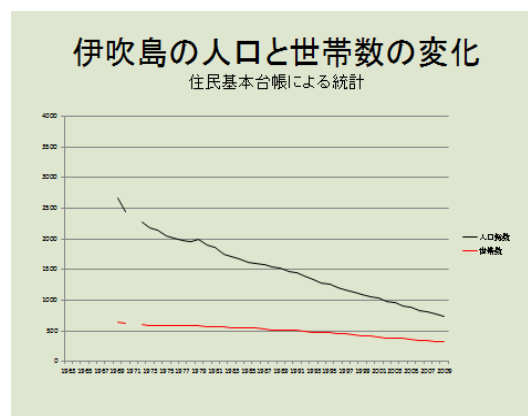
これがイリコ生産量のグラフです。生産量が青ですが、4千tぐらい獲れています。こういう形で大きな変動の推移をしています。右軸が価格でkg当たりの単価です。一番高いところで1kg当たり1,800円。安い時で400円。非常に価格に変動があります。価格変動の原因に品質の悪化があります。脂を含んだ「脂いわし」が獲れ始めると、価格が非常に下がってしまいます。なぜそれが起こるのかは分かりませんが、こういう形で非常に産額の変化も大きいし、それから単価も非常に大きくなっています。



これがイリコの取扱高です。最初の頃は18棟の網元があったのですが、今は17棟になっています。網元ではイリコでどのくらいのお金を得たのかですが、一番高いところで45億円です。これを網元1件当たり割ってみました。網元によって高い低いがあるのですが、最も高い時に2億5千万です。つまり一つの網元で2億5千万円の収入があったことになります。他の島々では産業が無くてお金が儲からないと言っているのにとっても考えられないような収入がある島だと僕は思います。



私は何か良い産業があつて、島興しに繋がったらなど、いつも島の産業のことを考えているのですが。伊吹島の2億5千万円の収入は63年でした。今では5千万と1億円の間ぐらいを動いていますけれども、それでも他の島に比べたら、ずいぶん儲かっている島だと考えることができるのではないのでしょうか。他の瀬戸内海の島々では、産業さえあれば島が富裕になるというモデルを今この島は持っています。ですから産業がないことが我々の一番の疲弊の原因だと考えていますが、島が産業を手に入れば島が豊かになるのかという問題もさらに残っている気がしております。



これは伊吹島の人口と世帯数ですが、長い時間をかけて次第に人口は減ってきている。戦後4千人くらいいたのですがけれども今は七百人くらいです。世帯数の正確な数字は今出せませんが、五百から千の間にあるはずで、人口がどんどん減っていつている。

ついこの前、本日参加されている三好さんにお聞きして、住んでいる人の地図を作りました。地図そのものは2006年の住宅地図です。ですから、この白いところは2006年当時に空き家になっていたところで、今常時住んでいるのが赤いところ。そして、島に本拠地を置かずに、不定期に住む人々の家は青で示しています。黄色が空き家です。今はこんなに空き家になっています。ですから、私が単純なモデルとして、産業さえ興れば島がどんどん人が増えていく、島が成功していくというのはどうも一概に言えないのかもしれないと考えつつあります。

瀬戸内国際芸術祭が行われました。学生さんと一緒に行ってみました。島スープという、観光のイベントが今年行われました。観光の先生とお話ししていると、観光で金儲けが出来るのは、非常に限られているのではないかと。だから観光を金儲けの新しい産業として考えるよりも、島に来てもらいその魅力を感じてもらおう。そのように感じた人は、定住人口に代わる可能性がある。

つまり滞在型の新しい観光を始めなければいけない。金儲けのための観光よりも、少し目的を異にした、要するに島に来て住んでもらう。なぜそんなことを考えるかという、沖縄の南の島々では、人口が増えています。交流人口といいますか、よそから来た人が入り込んで、そういう人達が例えばダイビングであるとか、いろいろな形の新しい産業を作りながら、島の中に溶け込んでいるからです。

島も従来のしきたりのようなものを振りかざすのではなくて、かなり柔軟に新しい人々を受け入れていくというような状況にあります。観光というものの中に、島の人々の生活ぶりを取り込んでいく。島の紹介のようなも



瀬戸内国際芸術祭



瀬戸内国際芸術祭



観光に関する仮説

- 観光で金儲けができる状況はごく限られている。
- 観光には別の効果大きい。島に来てもらい島を知ってもらい、その魅力を感じてもらおう。
- 交流人口が定住人口に変わる可能性が大きい。
- 滞在型の新しい観光を始める可能性はある。
- 島の側でも、新島民に対して旧来のしきたりにとらわれない島をよりよい状況にするために変化を考えることが必要。

の が 必 要 で は な い で し ょ う か 。

これは、伊吹島の出部屋の跡地の看板です。出部屋というのは、他の島では他火小屋というふうに言います。何かと言いますと、日本人は出血を非常に忌み嫌いました。出血があるというのは、汚れているというふうに扱って、一番女性が汚れているというふうに言われていて、今も相撲の時に土俵に上げてもらえない理由は、生理があるからという言い方をします。私自身も例えば伊豆諸島の青ヶ島という所で他火小屋を見たことがあるのですが、集落外れの本当に汚らしい小屋で、生理の時の女性はそこで過ごさなければならない。出産もそこでやるのだというふうな話を聞きました。

でも、伊吹島では他火小屋というのが非常にそういうネガティブな状況ではなくて、日頃厳しい生活をしている女性が、そこでいろいろなしがらみから離れて、自由に新しい友達と同世代の女性同士のネットワークを作るきっかけになっていく。そういう他火小屋が島の習慣の中ではプラスの方向に位置づけられて、女性のネットワークを作るための他火小屋仲間のようなものを作っていく。それが男性のネットワークとは違う女性のネットワークつくりにつながっています。島の中の社会生活の中で、別のものになっていく。こういうようなものを調べていただきました。

そうすると、その島へ来てもらう時に。島の生活のおもしろさとか、そういう奥深さを知ってもらうことに意味があると考えております。こういうものがうまく観光資源になるかどうかは、未定なのですが、観光産業が一つの交流人口を呼ぶきっかけになるだろうと思っています。そのためには島の多方面のいろんな魅力を紹介できるであろうと私は思います。

来年も伊吹島のことをもう少し調べたいと思っています。今、私達は産業があれば、島が発達するのだと単純に考えていたのですが、どうも網元に収入があっても、島の人の生活の充実性に繋がっていないようです。もう少し違った仕組みが必要なのかなと考えております。

出部屋



出部屋



産業が発展すれば島は安定的に発展するだろうか？

- 島に住み続けるためには、産業があって働く場所があることが必要条件である。
- 網元に収入があることが島で安定的に人が住み続けることにつながっていない。
- どのような仕組みが必要だろうか？島の産業が住民に経済的に連鎖関係を結ぶような仕組みが必要である。イリコの加工業のような付加価値をつけられるような製品の開発も一つの方向ではないか。

特に伊吹島からなぜ人が出て行かざるを得ないのか。イリコの漁期が3ヶ月で、実質30日と言われていました。ですから、それで短期間に2億といったお金儲けをするのですから働きとしてはすごいです。その他の時期は雇われている水夫の人達の仕事はなくなってしまいます。例えば、イリコの加工であるとか、今のマーケットで少し改善ができるようなお手伝いが出来ればと考えております。

今、私たちが考えている島の将来方向として、今、島に住んでいる人々の生活を基盤にして、多くの人々が共同して島に住み続けるビジョンをどうすれば描けるかという問題があると思っています。今、島にある人的・物的資源を活かして将来を考える。それから、島にいる弱者に対して配慮が出来るようなビジョンをどうすれば達成できるかということだと思います。

それから、それぞれの島によって、ビジョンの描き方は違っているような気がしております。伊吹島というのを事例にしながら、少し産業のある島でも盤石ではない状況が、どこから生じているのかを明らかにすることが我々の進むべき方向ではないかと考えております。以上でございます。

[本城先生]

稲田先生、ありがとうございました。それではただ今の発表に質問などがございましたら、どうぞご発言をお願いいたします。

皆様が考えていただいている間に私の方から質問いたします。良い作文を読んで下さいました。その作文は1958年に書かれています。イリコの生産量を見るとこの作文が書かれた後に伸びていますね。ですから、その当時は獲れなかったけど、その後は獲れるようになったということですか。

[稲田先生]

ちょっと説明が足りなかったのですが、イリコが少なかったですよね。で、急に上がっていますよね。あれは技術革新がありました。電気が引かれて乾燥機が入る。それまでは天日乾燥をやっていたから、獲れても天日で、人力で干すにはあれが限界でありました。ところが電気が引かれて、そして乾燥機が入ることによって、一気に大量のイリコを作ることが可能になったというのが、さっきのグラフのギョんと上がっているところであります。

島の将来を考える方向

- 今、島に住む人の生活を基盤にして、多くの人々が協同して島に住み続けるビジョンを描けるかという問題である。
- 今、島にある人的・物的資源を活かして将来を考える。
- 島にいる弱者に対して配慮ができる。
- それぞれの島において置かれている状況は大きな差となっている。

[本城先生]

しかし子供さんは獲れないと言って悲しい作文を書いております。ですから、やはり漁獲が少なかったということでしょうけれども、その後乾燥の技術があっても、かなりの量が獲れてこないことには額が上がらないですね。

[稲田先生]

船の技術もずいぶん上がりましたし、要するに総動員して、非常にスピードの速い船で獲ったものを次々に運んでいった。それからフィッシュポンドで吸い上げる。といういろいろな技術革新が非常に大量の生産を可能にしたということに繋がっていきました。逆に言うと、資源を食いつぶしていくということにも繋がっているようですね。たぶん裏腹というふうな面があると思います。

[本城先生]

なるほどですね。そのあと富栄養化がきて、少しイワシが獲れるような状況にはなっているといますけれども。皆様、他にございませんでしょうか。

[質問者]

今の漁獲高のことですけれども、あそこの中にはイリコの稚魚である「ちりめん」の漁が良いときには単価が上がっているのですよ。他の所でもちりめんを獲るようになってきているから燧灘の中に入ってくるちりめんが少なくなっているかもしれない。ちりめんが多いときには単価が高くなっているから、加工も簡単にできるし、かなり値段が高いからああいうグラフになってくるのです。それとですね、最近、重油が高くなっているのですよ。技術革新で乾燥機になったけど、それは全部重油を使っているの、イリコの採算ベースが高くなっている。だから結構、今、厳しい状況に置かれています。

[本城先生]

他にございませんでしょうか。小川先生、補足するようなことはありませんでしょうか。小川先生はグループの一員です。

[小川先生]

大変魅力的な島ですね。何度行っても飽きない。学びのツーリズムということで書かせていただいたのですけれど、観光というのも昔のように享乐的なものじゃなくて、精神性を重視する。そういった方向で来ていると思います。伊吹島にはそういう歴史とか文化とか、民族というものが非常に残っておりまして、非常に魅力的です。そういう意味では、これからの観光資源として大事に残していけば、充分魅力ある島ではないかと感じております。

[本城先生]

ありがとうございます。

[稲田先生]

例えば観光地用語ではイリコという存在すら知られていないというか、言葉では知っているけれども消費がなされていない。話を聞いていると、京都の人も使わない。だから、イリコは九州・四国・中国、非常に西日本に偏っている「だし」の材料になっております。もしこれを関東に売り込むことができ始めれば、少し状況が変わってくるのではないのでしょうか。たぶん今より単価が少し上がると思うのですが、関東ではイリコが使われていない現状が、たぶん一つの伸びていくのではないかというふうに思っています。

[本城先生]

そういうふうになると、それは網元の方に入るようなものではないですね。

[稲田先生]

そうなのです。今、製品は問屋さんに入札をしております。観音寺で。これが非常に単純な入札をして終わりですから、島に入札をする経路のものが入ってこないという状況があります。問屋さんは安く卸して、ストックして、というような形で流通がなされている。ですから、ここのところにも少し将来の問題があるかなというふうには思っております。たぶん、これだけの収入が上がりながら、実働の日にちが約 30 日なんていうのは驚きで、後の残りの日をどういうふうに過ごしたら良いのか、島の人々にとっての大きな問題もあるような気がしております。

[佐々木先生]

私は伊吹島の出部屋の風習に、とても興味を持ちまして調査をしていこうと思っております。妊産婦だけでなく、いろいろな先生方の話を聞いていると、どうも伊吹島の女性の生活とか女性の生き方に非常に独特な特徴があるようなものもあるかなと思います。先ほどの水汲みではないですけど、女性がかかり漁業とは違うところで役割を果たしてきたことも、別の特徴であるかなと思っております。これからまた勉強していきたいと思っております。

[本城先生]

どうもありがとうございました。研究を始められてまだあまり時間が経っておられません。今後進めていただき、内容の深い報告をお願いしたいと思います。他にございませんでしょうか。それでは稲田先生のお話を終わりにしたいと思います。